

テイリツヒにおける時間と空間の問題

— 存在論と歴史の関係 —

鬼頭葉子

序

パウル・テイリツヒの思想については多数の研究があり、研究内容も多岐に亘っているが、先行研究において一定の支持を得てきたテイリツヒ理解も存在する。中でも「組織神学」(一九五一—一九六三)に代表される後期テイリツヒの「存在論 (ontology, Ontologie)」が不変的静的で、歴史の動的要素を損なうとみなす見方である。また後期テイリツヒ思想の歴史哲学に対しては、存在論的・抽象的歴史理論であると批判する研究¹⁾や、R・ニーバーらのように、本来存在論と歴史論は相容れないと捉える見方も散見される。このように従来の研究においては、テイリツヒ思想の存在論に対する注目度に対し、「組織神学」を中心とする後期テイリツヒ思想²⁾の歴史哲学の評価、ならびに存在論と歴史論の関係性についての議論は不足していると思われる。本研究で筆者は、テイリツヒの思索における歴史論と存在論の密接な相互補完性を論証したいと考える。また筆者は、テイリツヒの歴史論と存在論を構成する中心概念は「時間」・

「空間」概念であると理解しているが、この見解についても検証する。本論文で扱うテイリツヒ思想の発展史的位置づけについては、前期・中期テイリツヒ思想の分析をもとに、後期テイリツヒ思想にどの点が継承され、また変化したのかを探索する形式をとる。特に存在論と歴史論が同一体系上で有効に機能しているかどうかの評価が分かれる「組織神学」をもとに、後期テイリツヒの思索を前期・中期テイリツヒ思想と比較し、その特徴を抽出していく予定である。後期テイリツヒ思想の詳細な議論については紙幅を超過するため、註に記載した筆者の拙論を参照されたい。³⁾

一 「時間」「空間」概念について

はじめにテイリツヒの思索において、歴史論(歴史哲学)を構成するのが「時間」概念であり、存在論を構成するのが「空間」概念であることを検証したい。ここではテイリツヒ思想の発展過程において、「時間」「空間」概念の基本的定義の共通点を論じる。

まず時間・空間は、「生あるものが実存するようになるその仕方である」(Tillich [1933b], S. 152)と規定される。また時間と空間の両者は、生のプロセスにおける他の個との出会いにおいて、時間は「自らに持続を創造」(Sich-Dauer-Schaffen)、「空間は「自らに空間を創造する」(Sich-Raum-Schaffen)」(Tillich [1929/1930], S. 11-14)も〇と規定されている。これら時

空間・空間の定義は、後期ティリッヒの『組織神学』に至り、「時間・空間」をカテゴリーとして存在論の枠組みの中で記述する試みへと展開していく。すなわち「時間・空間」のカテゴリーは、「精神が実在を把握し形成する形式」(Tillich [1951], p. 192)であり、内容から抽出された論理形式とは異なり、内容そのものを規定する形式とされる。そしてこの「時間・空間」(ならびに「因果・実体」)のカテゴリーは、「組織神学」において存在の有限性を示す形式である。有限性のカテゴリーとしての時間は、新しさという肯定的要素と、暫時性という否定的要素を同時にもっている。空間もまた有限性のカテゴリーである。空間も時間同様、特定の場所における現前という肯定的側面と、遍く占有することの不可能性という否定的側面を持つ。ティリッヒのカテゴリー論は、カント哲学と同様の認識形式でありつつ、カテゴリーの有限性と実存の関わりを明確に問う点が特徴となる。さらに「時間の意味に関する決断を時間の分析から描き出すことはできない」(ibid., p. 193)とティリッヒがいうように、実存にとつての時間すなわち時間の意味は、カテゴリーとしての時間とは別に措定される。

「実存にとつての時間」の概念は、ティリッヒのカイロス論から読みとることが出来る。一九二二年「カイロス」において、ティリッヒは形式としての計測可能な時間をクロノスと呼び、特定の内容を持つカイロスと結びつけ、カイロスに基づく歴史解釈を展開している (Tillich [1922], S. 53)。実存が、特定の

所与の運命によって導かれた状況に応答し行為しようとする「今」この瞬間が、カイロスとしての「時間」を意味する。このようなカイロス理解に基づく実存的時間概念は、一九二〇年代から後期の『組織神学』に至るまで、実存にとつての時間(カイロス)が、実存の決断による行為と所与の運命によって構成される特定の瞬間を示す、という点において一致して取り上げられる。カイロスにおける人間の行為が歴史を形成する。ティリッヒのいう「時間」概念は、クロノスの形式にカイロスの内容を有し、歴史としての特性を持つ。

またティリッヒは、空間の第一の指標として「並立(Nebeneinander)」(Tillich [1933b], S. 152)を挙げる。無機物から人間の集団に至るまで、生あるものはその固有の空間を有し、相並び立つ。後期ティリッヒにおいても、空間の特性は「存在の相互隣接性」(Tillich [1951], p. 318)である。また人間の場合、個体だけでなく、空間は「血族」「民族」「家族」等の共同体的諸存在をも示すことになる。このように「空間」概念とは、集団の領域も含め「存在」する事物が前提とする概念である。ティリッヒは「存在」の探求に関して、世界を経験することから得られる「存在的な(ontic)」ものを問題にするのではなく、存在するものの意味を問う「存在論的(ontological)」問いを提示する。よって一定の空間を占める存在者自体よりも、その存在者が人間の精神にとつていかなる意味を持つかを問う「存在論」が重要となるのである。

二 存在論／歴史論とは何か

二一 存在論の内容

テイリツヒの「存在論」については多数の研究が存在し、発展過程での思考枠組みや問題意識の違いが認められる。それでは前期・中期テイリツヒにおける存在論の中心的要素のうち、後期テイリツヒ思想に何が継承され展開したのか。他方向が変化したのだろうか。

一九二〇年代前半までの前期テイリツヒ思想（前期Ⅰ）では、存在論よりむしろ「形而上学（Metaphysik）」が、人間の認識行為（経験的なものに留まらず、精神の機能に基づき「意味」として把握される無制約的なものについての認識も含め）を統括する学——「精神科学（Geisteswissenschaft）」——として位置づけられていた。一九二三年「諸学の体系」の中で、テイリツヒは存在論について次のように述べている。「存在論の役割は、存在するものの構造と統一性を、それが真の意味を表現するものとして表されるよう叙述することである」（Tillich [1923], S. 232）。他方テイリツヒは形而上学について「無制約的なものを存在からではなく意味から把握する」（ibid., S. 231）学であると述べ、存在論は実際に存在するものに即して意味を表現する役割にとどめている（形而上学の一部分）。また「歴史学（Historie）」は存在科学であるが、価値の選択原理（規範・倫理）としては、精神科学としての側面を持つと位置づけられている。テイリツヒの存在論が明確に概念化されてくるのは一九二六年以

降、テイリツヒの歴史哲学がカイロス論に基づき展開するのに伴っている。テイリツヒによれば、理念や現実において認められる歴史性は、静的存在論では把握しきれない。ここに、歴史の具体的状況（カイロス）が真理（ロゴス）の把握形式を規定する、真理の動的理解が提唱される。真理は永遠の安定ではなく認識主体が決断する歴史において把握され、歴史論と存在論は明確な関連性を持つ。よって一九二〇年代前半（前期Ⅰ）と一九二六年（前期Ⅱ）のテイリツヒ思想における共通点としては、「存在論」また「歴史論」は共に精神科学の一部門であるという点、違いとしては、歴史論が存在論と密接な関係をもちつつ、テイリツヒ思想の中心をなしていたことが挙げられる。

一九二六年以降展開していった存在論と歴史論の関連は、後期テイリツヒ思想に明確に継承される。一九五一年「組織神学」第一巻では、存在論的諸概念はアプリオリに規定されているが、テイリツヒにとって「アプリオリ」とは、存在論的諸概念がひとたび見出されるや常に妥当するような、静的不変的構造ではない（Tillich [1951], p. 166）。ここには存在論とともに、歴史における動的真理の両者が前提されている。そしてこの後期テイリツヒ思想の存在論は、ハイデガーの存在論とも共通する実存論的な特色を持っており、テイリツヒにおいても、人間存在の本質的構造は有限性であり、しかも有限性の中心のカテゴリは時間とされる（ibid., p. 133）。このように有限性から存在論の展開が始まるという構造は、テイリツヒ自身が意識して

いたように、現存在の時間性から展開されるハイナガーの存在論との共通点が確認できる。

二二 歴史論の内容

ではテイリツヒの歴史論あるいは歴史哲学について概観しよう。テイリツヒは一九二二年「カイロス」において、歴史をカイロスの意識に基づいて解釈することを促す。なぜなら「精神にとつて、歴史的事であることは自明のことではない」(Tillich [1922], S. 53) からである。ちなみに一九二七年「終末論と歴史」では、歴史の定義が明確に示されている。「時間は前方へ向かう一方向性、不可逆性という性質を持っている。(中略)真の生起(Geschehen)においてはじめて、一面的に方向づけられた時間の形式は、相応の内容によって満たされる。このことは存在からみれば、次のように表現することができる。循環する存在の内緊張が、円環の突破、新しいものの措定、歴史へと向かうということである」(Tillich [1927], S. 113)。特にテイリツヒが本来的歴史とみなす人間の歴史において、人間の自由と運命の弁証法に由来する新しいものは、一回的な特定の瞬間において生み出される。存在の内における円環を突破して新しいものを獲得する時間によって構成されるもの、それが前期テイリツヒ思想において定義される「歴史」である。またテイリツヒは、トルネルチの歴史主義に関して次のように述べ、自身の歴史に対する姿勢を明らかにしている。「トルネルチの歴史主義の克服は、克服されている場を示していない。重要なのは、いつかある時

行われる何かではなく、あらゆる時代にすでに行われており、あらゆる時代が見出すことができ、見さなければならぬ何かとである」(Tillich [1926a], S. 172)。テイリツヒは、「無意味性が克服される時を先の時代に期待するのではなく、現在の歴史状況での当為を模索したのである。そして中期テイリツヒ思想に関しても、「歴史解釈への唯一の入り口は歴史的行為である」(Tillich [1938], p. 108) というように、テイリツヒの自論見は歴史意識とそれに基づく行為の喚起であることは共通している。

さらに「歴史意識の喚起」というテーマは、テイリツヒ思想において、一九二〇年代前半(前期Ⅰ)から後期・晩年期まで継続して主張された。一九六三年『組織神学』第三巻の記述によれば、「歴史の出来事」の認識には人間の「歴史意識」が介在し、出来事は歴史意識によって重要性を判断され歴史となる。後期テイリツヒにおいて用いられる「歴史(history, Geschichte)」の定義は「客観的要素と主観的要素の結合」(Tillich [1963], p. 302) である。「歴史意識は、自らを伝統の中に、すなわち世代から世代へと受け渡された一連の記憶の中に表現する」(Ibid., p. 306)。歴史的事の意識こそが、テイリツヒの歴史論における主たる課題であったのである。

以上概観したように、テイリツヒの歴史論は、実存にとつての意味に基づきその重要性が判断される実存論的性格が明白である。また、前期・中期テイリツヒ思想から後期テイリツヒ思

想に至る過程で、価値の選択に関わる歴史の精神科学としての側面がよりいっそう展開されていったという点を、変化として指摘できるだろう。

三 存在論／歴史論の関係——抗争と相互補完性として——

テイリツヒの思索における存在論と歴史論は、いかなる関係にあるのだろうか。関係性の一つとして、前期テイリツヒ思想(前期Ⅱ)で顕著な特徴であるが、同一のものが循環するスタティックな存在に対し、その円環を突破して新しいものへと向かうのが歴史であるという位置づけがみられる(抗争関係)。一方、存在論と歴史論が相互補完的ともいえるべき密接な連関を提示する関係もみられる(相互補完関係)。

まず存在論(空間)と歴史論(時間)の抗争関係は、一九二七年「終末論と歴史」、一九三〇年「キリスト論と歴史解釈」、一九三三年「社会主義的決断」、一九五九年「文化の神学」等に示される。「存在論は歴史哲学によって破られる限りにおいて正当である。抽象的な、歴史と何ら関わりのない基礎的存在論は排除される」(Tillich [1933a], S. 300)。テイリツヒによれば、存在するものは自己に帰還する円環において静的であるが、存在の円環を破るのは、方向性を持ち新しいものを指定する時間としての歴史である。またテイリツヒは「社会主義的決断」において、あらゆる現在するものの根源が「存在すること」であることから、空間と存在論を結びつけている。「存在論は、起源

神話との関わりにおいて、空間との結びつきにおいて存立する」(ibid., S. 300)。この「存在論」―「空間」―「起源」という結びつきは注目すべき事柄である。「起源」とは、共同体が形成される特定の場所(地)や民族(血)に由来する力であり、この力は個人の存立を保証する。しかし「起源」の強調は、「ゲルマン民族の血の神話」(ibid., S. 30)を掲げるナチスドイツの思想的根拠ともなった。テイリツヒによれば、「起源」は特定の空間にとどまるのみでなく時間の方向性を獲得することによって、「真の起源」へと完成する。「人間のどこから(の問い)は、どこへにおいてその成就を見るのである」(ibid., S. 292)。起源から起源への回帰は、「時間」によって打開される。またテイリツヒは「文化の神学」においても、空間の支配が優勢である場合の悲劇的結果を指摘し、空間の限局性ゆえに生じる集団同士の争いを問題とする。

他方、思想の発展史的位置づけでは「社会主義的決断」と同時期(前期Ⅱ)にある一九二六年「カイロスとロゴス」では、「事物の本質そのものが運命の中にあるがゆえに、決断において以外に、事物の本質を把握することは不可能」(Tillich [1926b], S. 289)であるとして、歴史と存在認識の連関が展開される。「理念の動的把握が貫徹されるところにおいて初めて、歴史は真の認識対象たりえるのであり、認識そのものは、真理の観念を断念することなく、歴史へと取り入れられるようになるのである」(ibid.)。

このように歴史と存在論との「抗争」と「相互補充性」は、テイリツヒの思索の同時期に交錯して出現している。この原因はテイリツヒの思想的転回ではなく、各論文を執筆したテイリツヒの意図に由来すると筆者は考える。「抗争」関係が強調される「社会主義的決断」では、「時間を空間の上に据えよ」と(Tillich [1932a], S. 302) により、空間と結合した起源神話を打破することが主要な目論見であった。同じく「抗争」関係が示された「文化の神学」に関しては、冷戦期における国家集団の闘争に関連し、「空間が時間をしのぐ実際の形式」(Tillich [1959], p. 33) であるナシヨナリズムを批判する目的があったと思われる。そして両者ともに、空間や存在に囚われる人間の傾向性に対し、時間や歴史に目を向けさせようとするテイリツヒの意図ゆえに、存在を打破する時間の性質がより強調されたとみることができる。

さらに前期テイリツヒの概念が、後期テイリツヒでいかに変化し維持されたかを考える時、歴史と存在の関係は極めて興味深いものとなる。主として一九二〇年代後半に展開されていた存在と歴史の抗争関係は、後期テイリツヒ思想においては、存在論を基に構成される「組織神学」第一巻・第二巻と、歴史論・共同体論によって構成される第三巻の構造の中で、相互補充関係として成立していると考えられる。「組織神学」第一巻・第二巻で用いられる、存在における本質・実存の構造に基づく存在論的記述に対し、第三巻では生のダイナミクスが展開され、生の

動態を叙述するためテイリツヒが用いた時間概念・空間概念が提示されている。この筆者の見解に関する典拠は次の通りである。「(中略) 実存的性質も本質的性質も共に抽象であり、実際には両者は〈生〉と呼ばれる複雑な動的統合において現れる」(Tillich [1951], pp. 66-67)。前述のように、「組織神学」におけるテイリツヒの存在論的カテゴリーは静的構造ではなく、実存論的存在論としての性格を持つている。しかし筆者が指摘したいのは、存在論で記述された諸性質が、特定可能な時間・空間内で出現する仕方を記述する手段として、「組織神学」第三巻で展開される歴史論が用いられたという点である。

よってテイリツヒは「組織神学」において、存在論におけるカテゴリーとしての時間・空間だけでなく、実存にとっての、一回的で固有な時間空間をも扱っている。有限性のカテゴリーとしての時間・空間の形式と、歴史的時間と歴史的空間に関する実存的関わりの中核は、テイリツヒが存在論的人間学を経験的場、すなわち生の領域に展開するプロセス(「組織神学」第一巻・第二巻→第三巻へのプロセス)を成立させうる鍵である。「存在」と「時間・空間」両者の包括的な議論は、テイリツヒの生涯の課題であった存在論と歴史論の関わりを、同一体系の中で論じようとする試みであったといえよう。

四 結び——後期テイリツヒ思想における「存在」と「歴史」——
テイリツヒ思想に対する全体的な評価として、「存在論的神学

者」という位置づけは多い。とりわけ「存在論的」との批判を受けがちな後期ティリッヒ思想に関して考察してみたい。一九五九年『文化の神学』の中で、ティリッヒは特定の空間の占有を強調する集団を批判し、時間の普遍性によって特定の空間の限局性を打破する可能性を見出す。ティリッヒの時間の強調は、キリスト教を「すぐれて歴史的な宗教」とみなす彼の立場と一致する。ティリッヒは、キリスト教の歴史性を示す事例としてアブラハムの召命物語を好んだという。ティリッヒによれば、アブラハムは特定の空間を離れ、空間が喪失しても失われない時間の支配と、空間の限局性を超える普遍性を獲得した。それゆえに歴史はキリスト教神学が扱う問題となりうる。「なぜなら神学の基盤そのものが歴史的であり、預言者精神が神学に、人間の実存に対する歴史的な見方を迫るからである」(Tillich [1938], p. 232)。ティリッヒは、時間と特定の空間の結びつきに限っては、時間の優位を主張する。この彼の観点から、存在論よりむしろ歴史論の重視を示すようにもみえる。しかし特定の空間において表現できないものに関しては、ティリッヒは存在論的記述を自身の神学の根幹に据えている。後期ティリッヒ思想では、例えば『組織神学』第一巻(一九五二)・第二巻(一九五七)における時間を超えたもの(創造と墮落、終末など)についての記述や、『存在への勇氣』(一九五二)、『愛・力・正義』(一九五四)における共同体の構造分析など、一定の時間空間内で特定できない事柄については存在論を適用して考える。

れる。

ここまで本論文では、前期・中期ティリッヒ思想の中心を構成する「存在論」ならびに「歴史論」の特徴を抽出し、それが後期ティリッヒ思想のいかなる部分に変容を経つつ継承されているかについて検討してきた。前期・中期ティリッヒ思想の発展につれ展開してきた、存在論と歴史論の相互補充関係は、後期ティリッヒの『組織神学』の体系構造において明確化されたというのが筆者の本論文での結論である。ティリッヒの「存在論」「歴史論」について、本論文でその内容の一端を提示したが、今後の課題として、ティリッヒ思想の各発展期に関し、よりのを絞った詳細な研究を継続してみたい。

文献表

ティリッヒの文献については次の略記号を使用。

EW: Ergänzungs und Nachläßbände zu den GW. Stuttgart 1971-1983.

MW: Main Works / Hauptwerke. Berlin / New York 1987-TC: *Theology of Culture*. Oxford 1959.

1922: Kairos (in: MW 4)

1923: *Das System der Wissenschaften* (in: MW 1)

1926a: Kairos. Ideen zur Geisteslage der Gegenwart (in: MW 4)

1926b: Kairos und Logos (in: MW 1)

- 1927: Eschatologie und Geschichte (in: MW 6)
 1929/1930: Vorlesungen über Geschichtsphilosophie und
 Sozialpädagogik (Frankfurt 1929/1930), in: EW XV
 1930: Christologie und Geschichtsdeutung (in: MW 6)
 1933a: Die sozialistische Entscheidung (in: MW 3)
 1933b: Das Wohnen, der Raum und die Zeit (in: MW 2)
 1938: The Kingdom of God and History (in: *The Kingdom of
 God and History*, New York)
 1939: History as the Problem of our Period (in: MW 6)
 1951: *Systematic Theology vol.1*
 1959: The Struggle between Time and Space (in: TC)
 1963: *Systematic Theology vol.3*
- ※本論文中の傍点は筆者による。
- 註
- (一) Richard, Jean: The Roots of Tillich's Eschatology in
 his Religious-Socialist Philosophy of History. in: Gert
 Hummel (Hrsg.), *New Creation or Eternal Now / Neue
 Schöpfung oder Ewiges Jetzt. Is there an Eschatology in
 Paul Tillich's Works? / Hat Paul Tillich eine Eschatologie?*
 Walter de Gruyter, 1991.
- (二) Niebuhr, Reinhold: Biblical Thought and Ontological
 Speculation in Tillich's Theology, in: Charles W. Kegley
 and Robert W. Bretall (ed.), *The Theology of Paul
 Tillich*. Macmillan, 1952 (1964), Ferré, Nels F. S., Til-
 lich's View of Church. in: Charles W. Kegley and Robert
 W. Bretall (ed.), *The Theology of Paul Tillich*. 藤倉恒雄
 『テイリッヒの「組織神学」研究』新教出版社、一九九八年、
 二二五—二二六頁。
- (三) 本論文では、テイリッヒ思想の発展史について、声名定
 道の研究による分類に依拠する(『テイリッヒと現代宗教
 論』北樹出版、一九九四年、三九—四八頁、『テイリッヒと
 弁証神学の挑戦』創文社、一九九五年、一六六—一七一頁)。
 声名の研究によれば、前期：第一次世界大戦—一九三三年
 (一九二五年：前期Ⅰ、一九二六年—一九三三年：前期
 Ⅱ)、中期：一九三三年—第二次世界大戦、後期：一九四六
 年—一九六〇年、晩年期：一九六〇年—一九六五年とみな
 される。後期と晩年期については、『組織神学』(一九五五
 —一九六三)全三巻に一貫性を見出すという声名ならびに
 筆者の立場から、思想的な連続性があるものとして扱う。
- (四) 鬼頭葉子、「二〇〇九年度京都大学課程博士論文」後期テイ
 リッヒの宗教思想における歴史と共同体の再構築——時
 間・空間概念を手掛かりに——。本論は、「課程博士論文の
 一部を再構成し加筆したものである。」
- (五) 本研究の註(14)を参照のこと。

- (6) Tillich [1951], pp. 193-195.
- (7) Tillich [1922], S. 68-69, Tillich [1926a], S. 175-176, Tillich [1938], p. 124, Tillich [1963], p. 369.
- (8) Tillich [1959], p. 32.
- (9) Tillich [1938], p. 120.
- (10) 諸研究の方向性として、テュリッホの存在論が、歴史的出来事を抽象化するものとみなす批判的見解は従来多くみられた(ニーバー、スネンズ、レン等)。近年では、テュリッホの存在論を神学的方法として建設的に評価しつつ、その一貫性を体系内での有効性を問う研究が主流になっている。サンチャー、藤倉の見解だが、テュリッホの存在論が後期の『組織神学』第1巻・第2巻の構想と第3巻の構想の境を区別して一貫したものとされる。他方、チャムットマン、アール、ウエンツ、昔谷が、後期テュリッホの『組織神学』における存在論で一貫性を見出している(筆者もこの後者の立場を取る)。またキルキー、ブーザーは、後期テュリッホにおける存在論と歴史論が密接な関係性をもちつつを指摘している。
- Nebuhr, Reinhold: *Biblical Thought and Ontological Speculation in Tillich's Theology*. in: *The Theology of Paul Tillich*. (ed.) Charles W. Kegley, and Robert W. Bretall. Pannenberg, Wolfhart: *Gründzüge der Christologie*. Gütersloher Verlagshaus, 1969 (1993), 7. Aufl., S.

テュリッホにおける時間と空間の問題——存在論と歴史の関係——(見頭)

405. Thatcher, Adrian: *The Ontology of Paul Tillich*. Oxford University Press, 1980. 藤倉直樹『トヘンツホの『組織神学』母説』。昔谷史樹『トヘンツホの現代宗教学』。昔谷史樹『トヘンツホの存在論神学』。Wittschieer, Sturm: *Paul Tillich. Seine Pneuma-Theologie. Ein Beitrag zum Problem Gott und Mensch*. Glock und Lutz, 1975. Wenz, Gunther: *Subjekt und Sein. Die Entwicklung der Theologie Paul Tillichs*. Chr. Kaiser, 1979. Gilkey, Langdon: *Gilkey on Tillich*. Crossroad, 1990. Boozier, Jack. S.: *Being and History in Paul Tillich's Theology*. in: Gert Hummel (Hrsg.), *God and Being / Gott und Sein. The Problem of Ontology in the Philosophical Theology of Paul Tillich / Das Problem der Ontologie in der philosophischen Theologie Paul Tillichs*. Walter de Gruyter, 1989. また存在論の発展過程として、昔谷史樹『テュリッホと現代宗教学』六三二-六六頁、昔谷史樹『テュリッホと存在論神学』二五二頁以下を参照のこと。
- (1) Tillich [1923], S. 181.
- (2) Tillich [1926b], S. 283f.
- (3) Cf. Annala, Pauli: *Transparency of Time. The Structure of Time-Consciousness in the Theology of Paul Tillich*. Luther-Agricola-Society, 1982, p. 42. 今井史樹『ド・トヘンツホの母説「キヤロス」と隠微の発展』——

- 歴史相対主義の克服を巡って——『基督教学研究』第十五号、京都大学基督教学会、一九九六年、九七頁以下。
- (14) テイリッチは『組織神学』で展開される存在論において、存在論的諸概念のレベルを四つ設定する。すなわち①固口—世界構造、②存在の基礎構造を構成する両極的諸要素(個別化—参与、動態—形式、自由—運命)、③本質—実存の二重性に基づく有限性、④諸カテゴリーである。テイリッチは、時間・空間・因果・実体の四つのカテゴリー(範疇)によって存在の基礎構造を記述し、人間が実在を認識する形式に伴う有限性(同時に実在の有限性)を表している。Tillich [1951], p. 164f.
- (15) Clayton, John P.: *The Concept of Correlation. Paul Tillich and the Possibility of a Mediating Theology*, Walter de Gruyter, 1980, pp. 169-175. Annala, Paul: *idid.*, pp. 35-53. 黄谷浩規『テトリッチと神学』(神学)二五二—二六二頁。
- (16) Tillich [1951], p. 189, p. 192f. Vgl. Heidegger, Martin: *Sein und Zeit*, 17. Aufl. 1927 (1993), Max Niemeyer Verlag, Tübingen, S. 17-19.
- (17) 中期テイリッチ思想における歴史論では、カイロス論とキリスト論の結びつきが極めて明確になった点は付加された相違点である。Tillich [1938], pp. 122-129. また第二次世界大戦後のテイリッチは、カイロスにおける具体的な行
- 為の内容をめぐって提唱することが少なくなった(「聖なる空虛」)。
- (18) Tillich [1959], pp. 30-32.
- (19) 『社会主義的決断』と同時期にあたる一九二九年から三〇年、歴史哲学における時間と空間の成立過程を中心に論じたフランクフルト講義では、時間と空間の構造分析が主眼であり、時間と空間の抗争をめぐっては言及されない。Vgl. Tillich [1929/1930], S. 11-15.
- (20) Pauck, Wilhelm & Marion: *Paul Tillich. His Life and Thought*, 1976 (1989), Harper & Row, Publishers, p. 138.
- (21) Tillich [1959], pp. 35-39.